

天声人語

ある時期、あるところに、傑出した野心家たちが集まることがある。「水滸伝」の故事にちなんだ梁山泊と呼ばれる。明治初めの築地梁山泊は、大隈重信の邸宅を指した。若き伊藤博文や五代友厚らが出入りし、明日の日本はどうあるべきか論じ合った▼1950年代の東京のアパート、トキワ荘には石ノ森章太郎、赤塚不二夫、藤子不二雄たちが住んでいた。漫画家として売れ始めた仲間も、まだ芽の出ない住人も、競い合い助け合った▼いまの陸上短距離走の世界も、目を見張る梁山泊ぶりである。リオ五輪で活躍した桐生祥秀、山県亮太、ケンブリッジ飛鳥に気を取られていたら、多田修平が躍り出た。そして、18歳のサニブラウン・ハキームのあの走りである▼自己ベスト10秒0台が5人そろった日本選手権100m決勝だった。3位に届かなかつた桐生と山県は、この種目で世界選手権に出られなくなつた。レース後に誓い合つたという。「僕たち2人が陸上界を盛り上げてきた。必ず戻つてこよう。正念場だ」。たくましく、まぶしい言葉だ▼戦前には「暁の超特急」こと吉岡隆徳がひとりで世界と伍していた時代があつた。世界水準があまりに遠い時代もあつた。いま日本勢にとつて世界は、そびえ立つ壁ではなく力を試す舞台であろう▼人類の歴史が、まっすぐ前に進んでいる。そう信じるのが難しい昨今である。しかし走者たちの身体は、100分の1秒単位を刻みながら、歴史を塗り替えていく。たしかな偉業である。

2017・6・27